

平成20年度 第1回 米子工業高等専門学校評議員会議事要旨

日 時 平成20年6月6日(金) 14時00分～16時00分

場 所 米子ワシントンホテルプラザ

出席者 委員： 河合 一 南場千尋 森脇 孝 金田 昭

本 校： 校 長 水島和夫 副 校 長 小田耕平

教務主事 香川 律 学生主事 山藤良治 寮務主事 大塚 茂

事務部長 神原敬三 地域共同テクノセンター長 足立新治

専攻科長 竹中敦司 総務課長 藤元高德 学生課長 山根茂雄

総務課長補佐 田内和夫 総務係長 中井義宏

テーマ 「認証評価の評価結果に対する本校の改善・取組状況について」

1. 開会挨拶

開会に当たり校長から次のとおり挨拶があった。

「本日の評議員会では、昨年度、本校が受審をした機関別認証評価の結果に対する本校の改善・取り組み状況について御審議をお願いいたしております。

大学評価・学位授与機構により行われたこのたびの認証評価では、昨年6月、本校が作成した自己評価書に基づく書類審査と教育関係者による実地調査が行われ、この3月に評価結果として高等専門学校評価基準を満たしている認定証をいただきました。

また、特にお手元の資料1に評価報告書というのがありますけれども、本校の優れている点として、本校の創造性をはぐくむ教育の取り組み、就職・進学状況について高い評価をいただいたところです。また、選択的評価事項についても、目的の達成状況について良好との評価をいただきました。

以上のような評価結果でしたけれども、今回の機関別認証評価受審は、米子高専にとりまして、学校の現状についてきちんと認識し、将来へ向けてより一層の改善のために努力していくと、そういうよい機会になったと考えております。

また、実際、昨年秋の実地調査ですけれども、いろいろ本校関係者からの聞き取り等が行われたわけですが、その聞き取り、懇談の中で調査委員から貴重な個別指導等もいただいております。これらの指導事項等について、その後、本校の各関係部署で改善に向けての検討作業を行ってまいりました。本日は、その結果について御審議いただいて、各委員の皆様の御意見、御指導をお願いいたします。」

2. 議事進行

(1) 会長選出

会長に河合委員が選出され、評議員会規則第5条第2項の規定により、会長が議長に就任した。開会に当たり議長から次のとおり挨拶があった。「前回は中期目標、中期計画でしたが、今回は機関別認証ということで、JABEEのようなものもありますし、分野別評価もあります。鳥取大学工学部ではすべての学科とは言いませんけれども、順番にJABEE、分野別評価、それから当然ながら6年の目標・計画、それから機関別認証評価、これだけ受けてきましたけれども、大変評価疲れをして

いるというところだと、皆さんもそういう状況であると思います。一番大変なのは、自己点検書をつくるということですね。これは実態も伴って、かつ文章もきっちり作って、裏付け資料も付けてということで大変な作業だと思います。」

(2) 進行方法等について

河合議長から、本日の会議の進行方法等について、小田副校長へ説明依頼があり、小田副校長から、「本会の主なテーマは、『認証評価の評価結果に対する本校の改善・取組状況について』であり、各委員から意見、提案の依頼があった。機関別認証評価を受けたときに、各基準に沿った評価というのは大学評価・学位授与機構のホームページに掲載しており、いずれも基準を満たしているということと、先ほど優れた点として校長が挙げた、いわゆるものづくりの教育がなされているということと、進学・就職状況が非常によいと、その2つの点を挙げていただきました。

訪問調査の折に、その評価とは別に、各評価委員の方々から、自己点検書、それから教職員、学生、卒業生に対して面接を行って、そのときにいろいろ情報を手に入れまして、その中から指摘事項ということが出てきたわけです。その指摘事項について、今日は一覧表にして、本校では評価・改善委員会で、指摘事項に対してどういうふうに対応するかということをご各部署で検討済ないしは検討中であります。その状況をまとめたものが本日の資料でございます。これについて、まず本校の方から説明をさせていただいて、こういうふうにしたいという提案をさせていただきます。それについて評議員の先生方から御意見等をいただきたい。

指摘事項が4ページありますので、説明の方の進行は私の方でやりまして、その改善案あるいは対応については各担当の主事等から説明をしていくという形にさせていただきます。』

(○印：各委員、●印：本校)

- 資料2の一番左側は認証評価委員の指摘項目、その次が具体的指摘事項、3つ目の列が改善・取り組み状況ということになっております。

本校では学習教育目標というものを定めております。5つの力と言っておりますが、これの周知・徹底についての指摘項目です。単位取得については周知が行われているけれども、科目、学習教育目標とのつながりを学生が理解していない。学習教育目標の周知を繰り返し行う必要があるという指摘です。

もう一つは、シラバスの活用について一昨年度、ウェブ公開をしているわけですが、その活用が見られない。活用の工夫が必要ではないかという指摘です。シラバスを使って学習教育目標との関係を学生に意識させる工夫が必要だということです。

それから、3番目の教養教育についてですが、これは以前から高専について教養教育についていろいろ指摘されていることですが、高専は教養教育が不足していると、教育体系を見直していくべきではないかという意見がありました。

それでは、各委員会の改善・取り組み状況について説明を行います。

- この機関別認証評価を機に、本校の学習教育目標あるいは達成目標をきちんと据えまして、学生便覧に示したり色々な場所にも掲示をする、あるいは学生への周知の機会を設ける、こういうことをやっていますが、実際のところ、学習教育目標の中で、今、自分が受けている授業が一体どういう位置づけなのか、これを学生自身がなかなかわかり得ていない、これは確かなことだと思います。そこで、一層の徹底を図るために、全学生に対し、カリキュラム系統図を作成し配布しました。昨年度はカリキュラム改定を行ったこともあって、全学生にこのカリキュラム系統図はもちろん、シラバスを印刷物にして渡しています。ところが、ここまでやりますと費用が随分かさみ、100万円程度かかりますので、これを毎年毎年、定常的にやるということはなかなか困難です。したがって、シラバスに関しては、冊子の形で配布するような形ではなくて、各教員が、ウェブベースで公開されているものを印刷し、各授業の最初で学生に渡す、このやり方を基本とし、さらにその時にカリキュラム系統図もあわせ配布をして、カリキュラム系統図の中で、一体その科目はどういう位置づけなのか、これを必ず最初の授業で説明をするよう指示しています。

それから、カリキュラム系統図、これも教室に掲示をするように考えています。先ほど議長の方からお話がありましたように、この後、米子高専はJABEEの認証受審準備に入ります。JABEEでは、最初に学校の教育目標があって、それに基づいた授業計画が続き、学生は、例えば30週あれば、その週ごとに自分がどこまでその内容を習熟できたのか、達成度チェックまでやる、ポートフォリオ評価が一般的になってくると思います。その準備も兼ねて、段階的にそういった形になるよう整備を進めていきたいと考えております。

- 目標の周知・徹底、それからシラバスについての改善・取り組み状況について、鳥取大学では、今、改善・取り組みを行っていますが、工程表といいますか、関係図みたいなもの、系統図みたいなものも、学科によってですが、ほとんどの学科は配っていますけれども、よっぽど工夫しないと、学生が見てもわからない。よほどわかりやすく工夫して作っておかないと、この科目を履修するためにはこれが必要だと理解しておくように言っても、なかなかわからない。その結果、何が起きるかという、力の入れ加減を間違えて単位を落としたり取れなかったりというようなことも起こっているのですね。これではいけないということで、ちょっと取得状況が悪い学生については、1年生はちょっとわからないのですが、個別に呼び出して丁寧に説明してわかるようにさせているということにとりかかったところです。だから、形を整えるのは、それは当然しなければならないのだけれど、それに実際、実が入るかという、ちょっとお考えいただいた方がいいと思います。
- 大変参考になります。学生一律ではありませんので、そういった個々別に対応していく、そういう努力も学校側としてはやらなければいけないと考えます。

- 内容がよくわかりませんが、目標の周知・徹底というのは、会社の場合もそうですけれど、なかなか末端までに浸透させるには、非常に苦勞するのですけども、これといった決定打はないというのが実際のところです。指摘事項があつて、改善取り組みの今、御説明がありましたけど、指摘された側のイメージと申しますか、非常にここはよく知っているというのは、逆にどんなことをやっているのでしょうか。何をイメージして、まだ足りないということ言われたのか、そこら辺が、まあこんなものではなからうかというぐあいには私は思ったのですけども、理想的なやり方のイメージって、どういうものを実際はやっているのでしょうか。
- 学生に対して自己点検書に、あなたは学習教育目標について知っていますかというようなアンケート調査をしております。

学生に対して、その達成度というのですか、認知度というのがやや低いところもあるという。それからまた、実際に恐らく面接のときに、学生に面接するとき、あなたは知っていますかというようなことも多分聞いたのだと思います。そのあたりのことを指摘されているのではないかということだと思います。
- 抜き取りみたいな形で学生に面接された結果の数字で、そうだと申すことですね。結果の数字でそうだと申すことですね。
- アンケート調査の結果が十分でない、データが、周知度があんまり高くないという評価だろうと思います。
- 私もちっと理解しにくいのですが、一つは新生がオリエンテーションのときにかなり説明をされますよね。それで、学生がそのときに米子高専の授業はどのように体系立って受ける必要があるとか、当然そのあたりも話はしてあつて、このぐらひは単位を取ってくださいとか、目標値としてこのぐらひはやってくださいというのは当然あると思うのですが、ちっとこの目標の周知・徹底というのは、繰り返してやる、ここにも書いておられますけれど、そのとおりにかなあという感じはします。具体的にどうしたらいいのかというのは、我々ではちっとわからないところがありまして、この取り組み状況の中に書いておられるやり方を繰り返しやられるというのは、これはもう当然理解できることではないかなあと思っておりますが、それと、この下にウェブ公開で活用が見られない、要するに今ですから、かなりインターネットを見る機会が多いと思いますが、このあたりは学生がどういう使い方をするのか、また、1人が1台ずつ持っているとか、そういうことはないのですかね。
- 学生が個人個人でパソコンを1台ずつ保有しないといけないということは米子高専ではやっておりません。問題になるのは低学年だと思います。高学年であれば各研究室に行き、あるいは情報処理センターにある端末の使い方等も熟知しておりますので、そういったものを介して見ることもできます。そのこともあるので、一番最初の授業で担当教員がウェブから必ず印刷をして、各自学生全員に配って、それに基づいて授業の位置づけとか、最終的にどの程度まで達成すればいいのか、こういう説明を必ずやるように、今回の機関別認証評価を機会に、漸くスタートをしま

した。

これは教務委員会ということになっておりますが、実はこの4月から米子高専ではキャリア支援室を発足させ、キャリア形成に関する支援の強化を始めています。やはり15から20歳、非常に若い年齢の学生がおりますので、いろいろ切り口を変えて、彼らの将来、彼らの職業、そういったものに照らしながら、今の勉強の位置づけなどもあわせ教えていくような工夫ができたかと考えています。

教養教育

- 教養教育そのものは一般教養だけではなくて技術に関する教養もあるはずなのですが、高専というのは教養教育、とりわけ一般教養が不足していると、これは創学時から言われていた内容です。今回、この機関別認証評価の訪問調査の委員の方も、そういう一般論でおっしゃっています。米子高専で現在開設している授業に関するデータとして、そこにちょっとお示ししましたけれども、大体一般科目に分類される科目が1年生から5年生までトータルして半分、専門科目が半分。五分五分という形で用意しております。どこまで一般科目で用意をすれば、専門も充実させながら一般教養も身につけさせることができるのかと、こういうデータまでは持ち得ておりませんが、半分半分ということです。

それから一般科目の配置については、何分15歳の学生を受け入れますので、やはり最初の方は一般科目を多目にし、徐々に専門科目が増えていくようなくさび形、こういった配慮をし、最近、環境問題が地球レベルで取りざたされるようになっておりますので、そういうトレンドの一般教養科目、情報リテラシー、技術者倫理とか環境科学、こういったものを全学科共通科目として設けるなどの工夫も行っております。十分ということはなかなか言えないかもしれませんが、それなりの対応はできていると考えております。以上が本科の方です。

- 専攻科は、専攻科委員会といたしまして、各科から委員を1名と、それから我々の専攻科のスタッフで構成されている10名弱ぐらいの委員会ですけれども、そこで話し合ったことでもあります。これは、先ほどありましたが、JABEE受審に向けて少しずつ動いております。それから、本科のカリキュラムを2年前に、平成19年だったと思うのですけれども、変えました。専攻科は21年度、来年度変えるということで、そこで少しカリキュラムを整理しております。教養教育が足りないという指摘を受けましたので、そこに書いてあるように、一般科目の方に、それまで余り判然としなかったようなものがありましたけれども、人文と自然科学系に科目を分類し、それぞれに最低履修単位を設置することにしました。

それから、2番目の方は、これは新規の科目ですけれども、社会技術論というオムニバス形式の技術教養教育あるいは技術教養みたいなものを設けようということにしました。内容については、今まさにどうしようかということで一生懸命考えているところです。こういったところで対応していこうかということでございます。

- また先ほどと同じような切り口になるのですが、高専は教養教育が不足しているということですが、当たり前じゃないかと思えます。不足というのは、専門的なものをより長期にわたってやるために行ってもらう学校が高専だという認識、一般的にはそういう認識でございますので、教養、一般科目が50%あるというのは、私も数字では初めて聞きまして、逆にそんなにあるのだなど、今、実は思ったのですけれども、これの指摘の根拠というのがよくわかりませんのでその辺の背景も説明していただきたい。
- ある委員の方の指摘ですけれども、高専ができた時に、要するにいわゆる短期の教育ということで、やはり大学に、大学と常に比べているわけですね。大学と比べたときに教養教育がやや少ないという御指摘だと私は思っております。要するに世界がグローバル化していくという中で、卒業生とか修了生というものが、技術だけではなくて、一般教養の部分でやや高専出身者は大学生に比べて不足していると、そういった指摘、産業界かどうか知りませんが、一般的な指摘がありました。これは本校だけでなく、要するに高専全体の問題だという指摘でございまして、指摘した委員もどうしたらいいかというのは、はっきりとした提案というわけではありませんが、要は高専全体の教育体系を再編していく上で、この教養教育をどう考えたらいいのかという御指摘だというふうに私は理解しております。
- なかなか欲張りな仕組だなど、期間は短くて、それで長い方と同じようにするというのは欲張りだなどというぐあいに思いました。
- やっぱり時代の変化に合わせ、必要となってくる教養、こういったものがあろうかと思えます。そういったものが例えば情報化の社会にあって、情報を取り扱う基本的な観念的なもの、情報リテラシー、それからやっぱりコンプライアンスの問題があり、あるいは環境の問題も取りざたされていますので、技術者倫理とか環境科学、一般教養というよりも技術を使う上での教養、こういったものが現実必要になってきていることは確かですので、こういった科目については、当然それは必要ですから、プラスアルファをし、こうやって新たに盛り込んでいると、こういう手順でございまして。
- この部分については、やはり小学校、中学校、高校、大学といろいろな場面があって、その中でたまたま高専は15歳から、高校、大学が一体になったような形で来ているわけで、中学校、小学校、高校、それぞれの中での本当に最低限必要な教養教育とかというものは、本当に実際問題はあると思うのですけれども、それが何か一緒になってしまったというか、15歳から上が一緒になった中でのどうこうという、そういう議論があるので、ここでどうこうという話にはならないんでしょうけれども、そここのところがやはりある程度整理をされていかない限り、なかなか高専のあり方というものが、専門科目とのバランスとか、いろいろなものがあるでしょうけれども、そここのところが上手にいかないのではないかなというふうには思っております。

それで、上の方の学習教育目標の周知ということについて、後援会という立場も

あるので、やはり15歳過ぎた子供たちに、どれだけというか、ある程度任せるといふ部分はあるのでしょうか、やはり親というか、保護者に向かっただけの部分といふもので、そういうところである程度徹底を図っていくとかというふうな形、それから同じように、大体自宅から通っている子供たちといふのは多いと思うので、ある程度家庭の役割といふもの、子供たちにそういうカリキュラム等を周知させるためにも、やはりそういう部分での徹底を、もう少し家庭の方に向かっても、保護者に向かってもやはり何らかの形でとっておけば、より効果的なものが生まれてくるのではないだろうか。なかなか親子とかいろいろな関係の中で難しい部分といふか、コミュニケーションがとれてない部分はあるかと思うのですが、基本的にはやはりまだ親がかりの部分が多いので、そのところの親のウエートをもう少し配慮をしていくべき部分があるのではないかなというふうには考えたりはします。

- 今の続きになりますけど、保護者会のようなものはなさっているのでしょうか。日を決めて保護者に来校いただくというようなことはありますか。
- 保護者会として、後援会があります。その役員の方に定期的に、月一ぐらいで来ていただくミーティング、あるいは支部会に私どもが参加したり、学校の中で支部会を開催し、そこでいろいろ御意見を頂戴する、こういう催しはやっております。
- 私の申し上げているのは、そういう後援会の役員さん方だけでなく、普通の方のことです。
- 年に1回は保護者懇談会というのをやっております、担任が中心になって保護者に対応し、いろいろ御説明をすると、こういう機会は設けています。
- 専攻科の方についてですが、一般教養科目を人文、自然科学に分類し云々と書いてございますけれども、これは何となく当然のこととして、問題はその後なのです。どのように指導していくかと、人文を例えば、おもしろくないですからね、人文科目は、はっきり言わせて。それを例えば4年生、5年生、3年生でとらすとか、これは専攻科ですけれども、高年次でとらすと、その意義が後でわかってくるかというふうなこともありますので、だから後、この先が問題じゃないかなと思っ
- おっしゃるとおりで、この先が問題で、箱だけでなく、その中身の方を考えていかなければいけないのは事実であります。

一般教養科目は1年生のうちには終わるようにはしておりますが、内容については、もう少し固まってからお話しした方がよろしいかと思っております。確かに中身といふのはすごく大事で、箱よりも中身の方が大事なのかもしれません。
- 一般論ですけど、私も一般教養と言われると、何が何やらわからないんですよ。何をちゃんとしておいたら一般教養をちゃんと教育したかと。これは昔から永遠の課題じゃないかなと思っ

ようというのはいつまでたっても解決しない問題だと思いますね。だから委員の方も多分わからないままにお話しなさっていた。だからカリキュラムで一般科目あるいは教養科目として分類されている科目数はどんなものかというぐらいでしか判断されていないと思うんですよ、中身までね。それはどこでもと思います、御苦労だと思います。

- 教養教育というのは、非常に重要だと思いますが、本来の目的、高専教育というのを考えたときに、ここに教育の理念、根本に返れば、この中身を見てでも基盤的技術を支える創造的な人材、それは高校からの一体、中学校、高校、それから大学、要するに3つの機能を持ったのが高専だと思うのですよね。それで、確かに教養があるかないかというのは、教養は当然身につけないといけないと思うのですが、本来の目的というのは、高専の使命というのは、やはり専門という技術教育というのが根本にあると思うのです。この中身を見ても、技術教育を行うという最初の理念がありまして、何かそうすると高専の役割って何だろうなというのを逆に高専の良さを、教養がいけないというわけではないが、やはり必要なのですけれど、本来の形、今やっておられる50・50の体制で教育されるというのは、非常に理念にかなったことだと思います。低学年に対しては、やはり一般教養が増えている、それから段階的に専門科目を増やしていっている、それともう1点言われたのが情報あるいは環境科学に対する、これからの、今の課題になっていることを教え込むという、僕はこういうのは非常に重要な位置づけにあると思います。

それで、この質問がどこが不足しているか、何が不足しているのか、そのあたりがもうちょっと明確に、何か見えたらいいなあと、あるいはこういうことをやりますよという中身があれば、非常に高専教育の本当に真髄というのは専門家を育てますよということがあるので、その辺がちょっと、理解できないところがあるのですけれど、このあたりどうなのでしょう。この質問が大事だというのはわかります。ただ、それが本当に高専教育の本筋は何ですかといったときに、この質問をされた方がその辺を大学と一緒にイメージされたときには、やはり違うなあとという感じがしています。このあたりがどうなのでしょうね。

- 金田委員と同じような考えを、おそらく質問された方も本当はお持ちになりながらおっしゃっているように感じます。私自身も高専の卒業生で、一つ感じるがあります。やはり工業高専ですので、物事を論理的、体系的に考えていこうとする態度は、やはり大学生に比べたらどうしても強くなってくると思います。結果的に高専の卒業生というのは頑固な者が多い、なかなか融通をきかさない、そういった評価に繋がるようにも思います。したがって、そういう論理的、体系的な考え方も良いのですが、ある時、膝の柔らかさと言いましょか、柔軟に物事に対応できる能力は、やはり技術者としても大切で、工夫しながら与えていくことは工業高専においても重要なことだと思っています。
- 鳥取大のことばかり言いますが、また来年度、教養教育の方、大幅に見直しをしようとしているのです。教養部がなくなったのが何年でしたかね、95年でし

たか、そこら辺から2回ほど改革というか、変更しておりますけれども、今回大幅に見直そうと。大幅に見直そうとしたら何が起こるかということ、昔に返ることなのですね。昔は教養教育が2年きっちりありましたから、何となくそういう感じがしております。もう大分今、いいかげんになっているのですね、教養教育というのは。とにかく幅を広げたらいいと、お話程度でいいよと。やはり昔のようにきっちり系統立ったものを含めて教養ですというふうになると思っています。これについては、もう各高等教育についてはなかなか御苦勞であるというのが私の思っている結論みたいなものです。

英語教育

- 英語教育ですが、指摘事項としては、一般に高専生というのは英語力が弱いと。外国等へ行ったときに非常に困っている場合が多いということを指摘しております。TOEIC等への積極的な取り組みを行うべきだということ。それから本校、昨年度からe-L教室が稼働しておりますが、このe-L教室を活用して英語教育を充実させたいと、そういうような御指摘がありました。
- 本校では現在の取り組みとして、英語力の向上と学習の動機付けを目的に単位認定制度を設けています。これをやって学生のモチベーションに繋げましょう、これはもう一般的です。また、英語に対する自分自身の適性を予め見た上で、一体自分がどういったところが弱いのか、重点強化ができるような工夫もしている、これもこの学校でもやっていることです。

副校長の方からありましたように、卒業生に対するアンケート調査を行っており、それを見ますと、最近では、かなりの数の卒業生が海外出張はもちろん、海外駐在経験を持っています。中にはアメリカの大学に編入し、現在、ドクターコースで研究を続けている、そんな卒業生もいます。

やはり日本の英語教育では、そもそも一番重要なリスニングについて、ネイティブスピーカーや機材等が不足し、なかなか十分為し得ていない、特に米子のような田舎では、周りに外国人がいるということもないですし、何らかの機会に英語を聞く、そういうチャンスを増やさないといけない、そう考えています。昨年度から、特にリスニングの強化を図るため、アルクのネットアカデミーという、コンピュータとネットワークを利用して、英語のリスニング、ディクテーションなどができるシステムを導入しました。

今後の改善策としては、とにかく日本というのは英語の勉強をしにくい国だと思いますので、これは意識的にやらないといけません。受験料のことなどもあるのですが、TOEIC全員受験を義務化していくとか、あるいは授業時間以外であってもe-L教室を開放していくような工夫を考えています。以上の内容は、一般科目の外国語科の方で御検討いただき、纏めたものでございます。

- 専攻科で英語というのは、一般教養の上級英語演習という2単位物と、それから専門の方では専攻英語講読というのがあります。どうやって力をつけるかということですが、上級英語演習の方ではTOEICを受けなさいよということも言っていますし、TOEICの演習問題を取り上げています。ただ、今後は組織的な取り組みが必要だろうと思います。

それから、ここには書いておりませんが、専攻英語講読の方でも今、ちょっとこちらで進めていることがあります。考えていることがあります。どうやったらその力を伸ばせるかということも検討しております。

- この英語力というものですけれども、これ、やはり実際には単位その他にかかわってくる時には、やはり英語の学習というか、学問じゃないのですけれども、教科の一つとしてのやはりとらえ方になるのですよね。従来、日本がずっとやってきた英語教育の続きみたいな形で最終的にはとらえられてしまうのですよね、結局は。そうすると、やはりなかなか、だれもそうなのですから、それが実際に役に立つかどうかということになってきて、何か本当に根本的に中学校、高校もそうなんでしょうけれど、英語教育という形になってしまうと、本当に単位の一環とか必須科目とか、そういうふうな、学年を一つ上がるため、高校を卒業するため、大学を卒業するためとかという、そういうとらえ方でしかやはり子供たちも学習、勉強しない状態があるのではないかなというふうに思います。だから、この高専でどうこうということではないのですけれども、この英語教育という根本的な部分が何か違っているような気がずっとしているのですけれど、いかがなものでしょう。

- 根本的なことを言い始めますと障りになりますのでこれも感想ですが、戦後、何とか若者に英語力をつけさせようと日本の英語教育がスタートしたわけです。当時、LLの機材、こんな物は買えようもありませんし、やはり文法を中心とした受験英語からスタートした、これはもういたし方ないと思います。ただ、先ほども申し上げたように、卒業生に対するアンケート調査で何が一番不足しているかとの問いかけに対し、ほとんどの卒業生が答えるのが英語力です。したがって、これに対しては何とかソリューションを提供しないといけません。

さっき申し上げたようなe-L教室、つまり箱物を用意して学校の中にそういう勉強の場を設けること、これも大事なことです。例えば、少し御紹介したように、以前は海外留学を希望する学生が多くなった時期もあり、あるいは海外の大学に編入学する学生がいた時期もあります。やはり学生の中にはそういう目標を持った者もおりますので、そこに少しずつ日を当ててやること、これも大事ではないかなと思います。それが先ほども申し上げた、キャリア支援室の仕事の一つであって、例えば、「貴方の将来にはこのような形があります、それについてはこういうキャリアを積んでおけば、将来の夢に向かって到達しやすくなります。」というような支援をキャリア支援室の重要な仕事の一つとして割り当てています。

- この高専の一つの英語の時間がありますよね、その中で結局、聞くとか直接コミュニケーションをとる英語を勉強する機会を常に与えていくとか、結果として、

その単位を認定するとかというものは本当に出席をするとか、また別な形での、それこそ実践的なという部分で何か工夫があつて認定されて、例えば中間テスト、中間や期末の点数で評価される、そういうやり方がある程度とっていくことによって、まだ大分子児たちの耳から入るものとかが増えてくるとか、それから自分で話すことが増えてくるとかという、そういう機会が何らかの形である程度意識的に作っていったら、結果として次の段階に行くための勉強のための英語とかということじゃなくてというところが、何かもう少し工夫ができる部分はないものだろうかと思いますが。

- 今仰ったように、やはり語学教育は実践だと思います。特に聞くことだと思っています。そのことを学生自身に伝える意味で、以前の評議員会でもご紹介しましたが、次の事例を聞かせています。うちにも留学生がおり、一般的に留学生というのは英語の勉強を積んでいる、そう考えがちなのですが、決してそうではない。例えばコロンビアの留学生の場合、母国では英語で授業も受けていませんし、ふだんの生活の中でも英語は使いません。ところがTOEICを受験させると860ぐらいとる。この理由は何でなんですかと尋ねたら、小さい頃からの娯楽のコンテンツがすべて英語だと、テレビにしても映画にしても、と言うのです。要は小さい時からそういうものに触れていれば良いのですよね。それを学校の中にどう取り込んでいくのか、これは一つも二つも工夫が要ることだと思いますけれども、要はそういうことをやれば、まず基本的な英語力というのはついてくるはずですよ。それから、やはり海外出張とか海外駐在すると、今度はコミュニケーションとは違う、契約などに関する英語が必要になり、これは別物ですので、そういった部分にも踏み込んで、学校教育の中で実践的な英語力を身に付けさせる事に役に立つのではないのかというような感想は持っています。
- 一口に英語といっても、今おっしゃったようにいろいろな場面の英語がありますので、それを広くとらえるとなかなか問題は難しいですけど、やはり私どもが見て、技術者の英語という格好で触れる機会があるのは、業界の国際会議なんかが行われると、公用語が英語で、英語で発表することになっていまして、日本の同業者の中からも何人か出られて英語で発表される姿を見ると、いいものだと思いつつ見るわけですが、よく聞いてみると、わりと言葉の範囲が専門の会議ですので、大体ある狭い範囲での組み立てでできているなどだんだんわかってきて、これはまた英語一般の話ではなく、英語という広い意味での一つの限られたスキルだなあというぐあいに思っております。少なくともああいう自分の専門のことぐらいは英語でプレゼンテーションするという実習は、今、こちらの高専でやっておられるかどうかはちょっとわかりませんが、経験があれば、限られた部分だけに絞りやすいですし、達成もできやすいのではないかと思うところです。そういうトレーニングはやっておられるのでしょうか。
- 確かに私も英語は全く下手なのですが、やっぱり技術英語といいますか、研究で使う、あるいは学会で発表という範囲内ですと、何とかしゃべったり聞けたり

するのですが、日常生活的な英語ですと、これ全くだめですね。今言われたような、そういうあたりかもしれません。全部が全部うまくやれというのは大変かもしれません。

ヒアリングをある程度大学及び高校の教育で身につけることは、ほとんど無理でして、それをしようとしたら少人数ですね、せいぜい10人、それからそうすると教員の方もたくさんそろえないといけませんので、ほとんど無理みたいですね。

一つの工夫としては、鳥取大学はTOEICを使って単位を取らせているのですね。何点以下ですと英語の単位認めませんと、そのために留年している学生もいます。だから、その点の設定が難しいので、随分低く設定しているのですけれど、だめですね。特にそこら辺、TOEICなんかで評価、基準をとりますと、できる子はできるしできない子はできないです。どうしてもできない子がいるのですね。教育というのはそこら辺をどうすくい上げるかというあたりかもしれません。

- 率直に言って、英会話も含めて、例えば学会発表でも今は英語で発表するとか、非常に重要になっていますし、実は私どもの職場においても、もう今、海外支援という形で企業みずからも海外に出ていただく、やはり英語が基本です、もう何にしる、これができないと多分ほとんど海外との交渉はできない。逆に受験というか、我々の試験を受けられたり、企業に行かれても、TOEICの点数がどのぐらいですかと、もうここが基準になってきますので、どうあろうと、やっぱり高い点の方を採っていくという形になりますので、それが教育といえ、資格ですから、ぜひこれは資格として学生に取らせていただいた方がよいのではないかと、率直に感じます。

ぜひこの教育は今後、グローバル化する段階でも、どこへ行っても英語は必要になるという感じはしております。

- 私も相当悲観的なことばかり言うておりますが、せめて技術的な単語だけでもと思ひまして、授業中に括弧でそれに対応する単語を書き込んだりしています、せめて単語だけでも語彙を増やしてやろうと。細かいことですが、こつこつと積み上げるしかないかなと思ったりもしています。

問題は、やる気が全くない子がいるということですね。これは、これ英語だけに限りませんけれど。

創造性教育

- 創造性教育につきましては、すぐれた点で、いわゆるものづくりワークショップという機械工学科で行われているものづくり教育、これが特に訪問調査のときに見学コースでありまして、委員の方からお褒めをいただいております。ただ、単一科目での創造性の醸成だけでは創造性というのはなかなか身につけませんよという御指摘だと思います。学校全体でいわゆるカリキュラムをうまく運用して、創造性をはぐくむ教育をつくり上げていく必要があるという御指摘だと思っております。

- この指摘を頂いた時、まず委員の口から出たのは、創造教育というのは自分が考えても本当に難しく、こうしたら良いという結論もなかなか見当たらない。ただし、時節柄そういったことに十分取り組んでいく学校の仕組みを作らなければいけないでしょう、こういう御指摘でした。その通りだと私も思います。

まず、改善・取組状況について御説明する前に、このことを申し上げておきます。よく創造とか発想とか、こういうことが大事だと言われることがあるのですが、何も無いところから、私は何も発想は生まれないと思っています。やはり小さい時からの経験というものがあって、その中のヒントから、何かのひらめきが出てくる、やっぱりこういうものだと思います。ところが、今の若者というのは、山の中を駆けずり回ったような経験もありませんし、いろいろな素材に触れる、そういう経験も持っていません。以前は、米子市内の家電屋にも電気キットなどが置いてあり、電気系の学生のほとんどが、キット製作の経験を持っていました。機械系の学生であれば、ほとんどがバイクに触れたり、一部には分解までしていた時代です。最近では、パソコンと携帯とゲームくらいで、画一化されており、何とかして、まず高専に入学してからそういうものづくりを体験させ、その中でものづくりに必要な、楽しさを感じてもらいたいと考えています。その後、それに必要な理論が、こういった理由で大事になってくるのだ、と言う手順だと思っています。そういう意味では至るところで言われているプロジェクトあるいはプロブレム・ベースト・ラーニング、これが中心になるだろうし、高専教育というのはもともとこれを実践しているということで高い評価を頂いているとも思っています。ロボコンにしてもプロコンにしてもデザコンにしてもそうだと思います。MITからスタートし、東工大なども取り入れて、今は高専、大学、至る所でプロジェクト・ベースト・ラーニング、これをやっているわけです。

ところが、米子高専、いや、どこの高専でもそうなのですが、中心になってやっているのは学科、そういう取り組みが多いのです。学校全体として組織的、体系的ということになると、なかなかそこまで整備できていないのが現状です。従って、訪問調査で話題に上り、一方、優れた点として本校の実践例を特筆頂いたわけですから、その授業を多くの教職員が見て、ものづくり教育の実践がどういうものなのか勉強する機会を設けましょう、こう考えたわけです。具体的には、学生が実際に物をつくってデモンストレーションをやる今年の11月ぐらいに計画しています。

この前の評議員会でも申し上げましたが、よく最近の子供は理科離れと言いますが、実は、教壇に立っている若い教員そのものが、もう理科離れの世代の教員なのです。そのこともよく考えて、こういう体制づくり、仕組づくりはしていくべきだと思っております。

- 私ごとで恐縮ですが、私は小学校の免状を持っています。免状に必要な図画工作のレポートを通信教育で書いたときに、その中にも創造的人格の育成について述べよというのがありました。そこで1つあったのは、固執すること、物事にこだわるということ、これが創造性を豊かにさせるための一つの方策だということが頭の中

に入っております。専攻科ですけど、J A B E E受審をねらったカリキュラム改正につきまして、その一つの柱が先ほどの社会技術論と、それからもう一つが創造実験です。創造実験は、生産システム工学専攻と物質工学専攻が一緒に行う実験ですが、これが何かきっかけになるのかなあ、もっと言うと、ならなきゃいけないかと考えています。今度は担当者を出して、つまり全く異質の人間が集まってやるわけですから、どういう形になるのかというのも心配ですが、ぜひともこれを使って創造性を涵養していきたいと思っております。

- 創造性教育というのは、私もちょっと何やらわからないのですが、私どももそのあたりをちょっと支援させていただこうということで、長期インターンシップですね、これを今年度からスタートさせようということで、まさにこれ、高専、大学一体的にやりたいということで、本当に、ものづくりの現場に入って、あるいは研究機関に入って一緒にやっていくとか、そういう現場を知ってもらうことをやっていきたいと思っています。これはまた改めてお願いに参りたいと思っておりますが、ものづくり自体とか課題解決という創造性をまさに生かして、新しい技術の開発もそうです、研究もそうですが、そういうことに高専の学生が実際に携わっていくということが、非常に大事だと思っています。

それで、ロボコンなんかも本当に各高専の独特な手法でああいう取り組みをやっておられる。これも立派だなと思っていますし、それから米子高専でいえばデザイン的な、もう非常に優秀であるという評価を受けておられますし、こういうことをどんどんやっていかれて特徴をつくられる、あるいは自信を持たせるということは、就職後も非常に大事ではないかなあと思います。

一つは、やっぱり経験が一番大きな、将来的に自分の、ものづくりであろうと研究開発であろうとつながっていくのではないかなあと思いますので、ぜひこれだけは進めていただきたいし、新しい発想であれば、ほかのことも考えてもいいと思います。

中国地域の産学官連携のシンポジウムがちょっとありまして、そのときは5大学の学長が皆さん話されました。その中で何があったかという、これからちょっと変わるなというのは、大学間連携とか、あるいは高専と大学との連携、こういうことをどんどんやっていくべきじゃないかというような意見が出ています。それは文部科学省の方からそういう意見が出まして、道州制をにらんでやっているのかどうかということにはわかりませんが、ただ、これからも人事交流、要するに学生が相互に交流をするとか、そういうこともあっていいのではないかと、あるいは教員教育にもそういうことをやったらどうかというような御意見がその場に出ていました。というのは、学校自体を特徴づけるということもありますし、得意分野を伸ばすということで、そういうことが今後あっても良いのではないかと、各大学の学長自らそういう意見が出まして、これは将来的にこうなるのかなあという感じを受けました。

ただ、やはり大学間連携とかになりますと、大きな大学ほど強くなるなあという

感じは受けるのですが、「特徴のある」ということが僕は一番大事なことであって、米子高専の強みは何ですかと言われたときにそれが出せる、そういうことをぜひ学校の特徴を生かしたものをどんどんやっていただきたいという感じがします。

- やはりこれはあまり座学では身につけませんね。やっぱり実践がないと。ただ、長期的インターンシップを考えていただいているというのは大変ありがたいことなので、大学の、あるいは高専さんの方も……。

インターンシップですが、ちょっと参考にもならないのですが、カナダの大学、特に工学部はすごく力を入れていまして、3カ月学校で勉強して、次、3カ月会社で実習して、また次、3カ月授業して、次、3カ月という、そういうプログラムなのですね、教育システムが。5年間で卒業なのです。その3カ月働いて学資を稼ぐというようなこともあるわけなのなのですが、日本の大学はどこでもしておりませんが、前の学長がそんなことを言っておられましたが、なかなか働く先を探すのが大変です。なので難しいなと思ったりしているところです。

学習支援等学生のニーズ把握

- 学習支援等学生のニーズ把握というのは、例えば留学生とか、あるいは4年次の編入生、または身体に障害を持つ学生、こういった学生に対する学習支援と、それから資格取得などのための支援、そういったものを含めているわけでございます。

一番上の組織的なニーズの把握の取り組みが不十分というのは、いわゆる個々の教員が、例えば資格取得の案内とかやっているようだが、学校全体として取り組みがなされていませんよという御指摘でございます。

その次も同様で、編入学生がいるが、学科によって取り組み状況にかなり温度差がある、そういった御指摘です。それから、あとは学習環境というのでしょうか、専攻科の学生の中に科目の学年配当がちょっとよくなかった、そういった声があったということです。それから、駐車スペースの問題。これも学生からの訴えがあったといえますか、そういう御指摘でございます。

あと、各委員会の方の説明をお願いします。学生委員会の方からお願いします。

- 学生委員会の方の改善ですけれども、御指摘のとおり、従来、組織的なニーズの把握というのは、やはりできていなかったと思います。それで、勢い学生のニーズということになりますと、潜在的なものを何とかこちらで掘り起こすとか、あるいは先取りをするというような形で不十分だったとは思いますが。こちらがそういうふうにして幾つかの更新をすると、ぴったり学生に受け入れられ、よかったなということと、いや、空振りに終わるといようなことも多かったと思うのですが、認証の評価を契機に学生アンケートということですので、例えばその中で取り組んで改善できた点を一つ紹介いたしますと、クラブ活動の方で体育系クラブの部室がないクラブがございまして、それはそのクラブの者何人かが、ぜひ部室が欲しいということでした。幸い費用的なところは工面できましたので、早速これはそのクラ

ブの部室を用意しまして、今実際に使っております。そういうことができるという
ようなことで、やっぱり組織的なニーズの把握は必要だなというふうに考えており
ます。

一番下の駐車スペース云々というところですけども、米子高専、創立当初から敷
地面積は変わっていないと思うのですが、そのころに比べますと学科は2つ増えて
おりますし、専攻科もできておまして、建物が倍ぐらいにはなっているのでない
かと思うのですが、そういうことで、学校の中に学生用の駐車場を設けるとい
うのは、もう今は不可能です。それで、二輪については何とか確保しているのす
けれども、四輪車については、周辺に民間の駐車場がかなり数ありますので、そ
ちらの方を利用するように勧めているということです。今のところ、そういう周
辺の駐車場もなくて困っているというような話を聞いておりませんので、そう
いうことで対応せざるを得ないということかと思えます。

- 続きまして、寮務委員会の方の学生のニーズ把握について説明を加えさせて
いただきます。

寮務部、寮務委員会としましては、社会で役立つ共同生活の場を目指してとい
うスローガンに示す、ベター・コミュニティー・ウィド・コーポレーションとい
うふうなことを今年度はスローガンにして、教員10名、それからあと事務方で常勤
が2名、それからパートタイムの寮母が3名で対応させていただいています。

私どもは、去年の認証評価をにらんでといいますか、19年度に実際にこうい
った学生のニーズ把握のためにアクションを起こしましたというふうなのが、ち
よっとこの表の後ろにあります、寮務部における学生のニーズ把握と学生支援
(新たな取組)というふうなので、3点ほど書いてございます。

1点目は、学習に関する支援及びニーズ把握ということで、19年度から寮生
会役員をTAとしまして、1年生に対するケアが非常に大事というように把握して
おりますので、こういった学習支援を年に8回実施しました。これは上級生の経験
、体験を1年生に伝えることもありますし、また役員とのコミュニケーションを
うまく円滑にやるというような学習面以外の効果も、この後にアンケート結果
とかを載せてありますが、出てまいりました。

2番目は、通常の生活について我々、当然のことながらサポートしているん
ですが、今度新たに社会人として出る5年生と、それから専攻科2年生を対象
にマナー講習講座、これは限定したのはテーブルマナーというふうなことだ
ったのですが、こういったものを、今、寮食堂業者とタイアップで、学生
たちも無料で豪華なディナーが食べられるということで参加してくれま
して、こういったところでテーブルマナー講習みたいなのをさせていただきました。
この評価としては、非常に良かったというものがほとんどでございました。

3番目としましては、今は現在、専攻科と本科との行事予定がばらばら
で、別々で進んでおります。夏休みですね。これは非常に教員にと
っても、夏休みというか、研究の部分がとれないとか、いろいろな
デメリットがございまして、これを統一す

るべく Semester 化をにらんだ夏季休業に関するニーズ把握というといったものを去年からやっております。

これをもとに、実際、寮生の一番の問題点は何なのかということですが、やはり寮の部屋の中のエアコンがきいてないから、夏場、8月の頭から中ぐらいまで過ごすということになると、それが一番苦しいというのが70%ぐらいの学生が、寮生が訴えているという現状がございます。その後にありますのは、特に私、この3つを選んだのは、よく衣食住という言い方をしますが、寮務部、寮務委員会としては学食住というふうなのをターゲットとして考えればいいということで、この3点を特に去年からニーズ把握をさせていただいています。

その裏にありますのは、通常的生活支援の実情ということと、先ほど御紹介いたしましたアンケートの結果ということになっております。

- 教務については、特別な学習支援を要する学生ということで、3つ挙げています。最近、心にいろいろ問題を抱え入学してくる学生もおりますが、特に中学、高校、あるいは大学などでも義務づけられてきている発達障害を伴う学生の支援体制、これを構築するために特別支援教育室というものを立ち上げました。

それから、外国人留学生、これは3年次編入生です。昔は、米子高専は留学生に手厚過ぎる、そこまでやらなくても良いと、よく中国地区高専から言われたものですが、やはり高専でも色々な仕事が増え、なかなか手厚く、個別のマンパワーだけでは支援がしにくくなってきています。それと同時に、最近、改めて留学生30万人計画がスタートしましたが、一応10万人計画が達成できた時点で、かなり留学生の学力や日本語能力が低下してきておりましたので、留学生特別カリキュラムを吟味し直し今年度からスタートさせました。

それから、工業高校、普通高校からの編入生、これ4年次ですが、これも受け入れております。この4年次編入生についても、入学後、留年したり、あるいは退学したりということが出てきておりますので、編入試験に合格し、入学する前に課題を与えて事前学習をしてもらう、あるいは入学後、特別の支援グループを設けて補習を行う、こういう体制を始めております。

- 駐車場のスペースの不足というの、高専の場合は免許が取れたら車に乗ってきていいということですかね。

- 基本的には、四輪は4年生、5年生ですね。それからオートバイ、原動機付き、いわゆる原付については3年生からということです。それで、例えばちょっと自宅が交通の便利が悪いところにあるとかというような場合は、例えば2年生から原付二輪での通学は許可しているということですね。

高校生に比べると、広い地域から通っている学生が多いので、やっぱり自転車というわけにもなかなかいかなくて、3年生あたりは、かなりオートバイそれから4、5年生もかなり四輪で通っているという状態ですね。

それで、いろいろなところでも、米子高専の方針はこうだと思っておりますけれども、「禁止、禁止」ということでなくて、それは四輪で通学してもいい、そのかわりき

ちんとそれにふさわしいようなマナーとか法規等の講習会等の機会は設けること。二輪の場合ですと実技の講習会も実施しております、きちんとそういう力をつけた上で許可するという方針です。必ずしもうまくいっているかどうかわからないのですけれども、そういう方針です。

○ 寮のことについて、このアンケートとおられるのですが、よかったという人が非常に多いのですけれど、どちらとも言えないも、これを入れたらすごいのですが、よくなかった人の対応というのはどういうようにやっておられるのですか。

● 例えばよくなかったというふうなのが二、三人いると、大体その子たちはコメントを書いています。例えばこの資料の中で、アンケートの中でその他のコメントのところに、勉強のところですね、学習支援とかで、M科の先生をもっとサポートに呼んでほしかったとか、こういった足りないところはやはりP D C Aを回さないためですから、こういったところはまた勘案しまして、そういった先生方に出ていただくとか、さらに今年については学習支援を、名前を変えまして、実は教務の方でもやっていたというわけですね、定期試験の前に。それと寮務でやるのと、ちょっと毛色を変えようということで、今年は新1年生に対して上がったばかりの2年生ですね、こういったものをT Aに当てて、今習ったばかり、この先生、どういうところがポイントとか、初めての定期試験に臨んで、こういった心構えであればいいかというようなことを新たにまた取り組んでおります。ですから、その少数意見というのは、そのままないがしろにはしないで、特にこのP D C Aを回すために、いい意見として把握させていただいています。

○ それから、担当教員の個別のニーズの吸い上げ、組織的なニーズ把握が必要ということの中で、最近少しいろいろなところでよく聞くのですが、発達障害の支援ということで、これ、高校でも大学でも一緒だと思うのですが、大変なフォローをしないといかんということもありますが、具体的にはどういうことをやっておられるのですか。

● 実は今日もこの後、そういう知見を持った方に学校において、まず一般的な勉強会、これを開きます。それから、発達障害の学生といっても、障害の現れ方というのは千差万別です。その個々の場合に応じて、例えばこういった事例についてはどう対応したら良いのでしょうか、そういう質疑応答形式の懇談会などを、今年も予定しております。

なお、このような学生が最近多くなってきているといっても、定常的に入学してくるということでもありませんので、個々の事例に対応する形で、少しずつ仕組みを整備していております。

○ 入学時に、これ、市町村は多分そういうのを把握していると思うのですが、学校に入ったときに、多分そういうのは余り言われてないと思うのです。だからできるだけ隠したいということと、家族一体的に、家族もやはりフォローしなければなりませんし、その辺、学校に実際に来られてからわかるということが非常に多いということをよく聞くのですけれど、専門のケアの人を置くとか、指導できるような人

を。この辺は高専の中にそういう人を置くというような、予定はないのですか。多
いか少ないかの話だと思うのですが。

- 米子高専はどうやって情報収集しているかといいますと、入学前、試験を受ける
ときに、まず事前相談をできるようにしてあります。その後、入学が決まった後に、
また調査を行います。このような方法で、特に小学校あるいは中学校から障害を持
っている入学者については、早目に把握するよう工夫しています。

ただ、そういう発達障害に関係した就学上の問題点というのは、個々のケースで
随分異なってきますので、その対応について非常に苦心しながらやっている事例も
ございます。特別支援教育室を立ち上げ、学生相談室長を特別支援教育コーディネ
ーターに据えはしましたが、セミナーなどに参加し必要な知識を身につけさせる
というところまでは、まだ準備をしておりません。

- この学生のニーズとは、結局どういう、より具体的に、それぞれの子供たちも、
本当にわがままなことも含めて、自己中心的なことも含めて、ニーズをひとくくり
にしたらもの凄いい数があると思うのですけれども、ここで言うニーズとは、より具
体的にはどういう内容のことなのでしょう。

- 今日挙げているのは、弱い立場、すなわち留学生であるとか、あるいは編入学生
がまず挙げられます。それから進路とか進学とかの相談とか、あるいは就職先がど
んなものがあるかとかという、そういう紹介ですね、そういったものも含まれます
し、それから資格取得にどんな試験があって、どうやったら受けられるのかとか、
そういった情報提供、そういったものもこのニーズの中に入ってくるということで
すから、教科教育以外、それから課外活動をちょっと除いて、学校で生活をしてい
く上で学生がいろいろ学校に期待するということですかね、支援してほしいと、そ
ういったものがここに含まれているということです。

学校では、この自己点検にあわせて学習環境に対する学生へのアンケートという
のをやっております。今、これは各部署で対応を検討しておりますけれども、施設
であるとか、あるいは実験器具であるとか、そういったものは学生、どういう意
見を持っているのか、そういった調査も今やって、まとめているところです。そう
いったものも含まれるのではないかと考えています。

- 私も非常にニーズという言葉聞いたときから、違和感をもっていて、今の
御説明でわかりましたけれど、内容を見る限り至れり尽くせりだなと思いながら見
たのですけれども、やっぱり必要なことは当然必要なのですけれど、学生が消費者
のようになって、教育の一環として、学校がサービス提供者のようになるような
ことが、学生の中で勘違いするようなことがないようにしてほしいと思います。
- 大学の方でも、何となく私も最近は学生さんなんて言っているのですよ。だから、
何か学生じゃなくて生徒みたいな感じに最近の学生はなっけつつありますね、そ
んな印象です。

安全衛生管理とか自己点検書の不備というのは、この評議員会で検討する必要が
ありますか。ちょっと何か、別にといい感じがするのですが、当然のことをして

くださいと。最近は大学ですと独法化になりまして、この安全衛生管理というのは随分強く言われているようになりました。だから、管理者も資格を取らせてやっております。当然だったのでしょうけれど、今までしていなかった。

自己点検書の作成についても、大変御苦労さまですねという言い方しかないのですけれど、大体慣れてこられると思います。J A B E Eもそれだけ大変だと思います。

学生相談箱、施設の利用方法・時間

- 本校には学生相談室といたしまして、これは先ほども学生からのいろんな要望ですね、例えば進路のことであるとか、あるいは自分の健康のこととか悩み事とかいろいろな相談事、これを受け入れるのが相談室ということですね。相談室では、相談箱とって、目安箱みたいなものを学校のある箇所に置いてあるわけですが、その使い方が限定されていますよという御意見でございます。

これについては、もともと本来、学生相談箱というのはいろいろな学生からの相談事を受け入れるという本来の趣旨があるわけですし、今後、各部署と検討して、どういうふうはこの相談箱を運用していくかというのは今後、検討していきたいということでございます。

それから、各種施設の利用時間についてですけれども、これは図書館情報センターの利用時間、これの周知が不十分であると。学生にいろいろ聞いてみると、利用時間がきっちりわからなかったと、そういうこともあったようで、もともと図書館情報センターの方では、いわゆる新入生とか編入生にはガイダンスをやっておりまして、一応周知はなされているわけですが、学生の方の認知度というのがやや低いという結果だろうと思っております。これについても図書館情報センターの方で周知の方をさらに徹底していこうということでございます。

また、現在、情報センターの利用時間が午後5時までに限られている時間もございますので、今後、これらも少し見直しが必要かなというふうに考えております。

- 図書館の利用率というのは、どうなのでしょう。たくさん利用しているかどうかぐらいのことで結構ですけど。

- 結構レポートなどを書くのには利用したりしているのですけれども、一般的な使い方というのですかね、そのあたりはやや利用度が少ないような気がいたします。

先ほどの学習環境のアンケートにも、図書館についての蔵書のアンケートとか、いろいろこれもやっておりまして、これもまた改善していこうと考えております。

- 目安箱は記名式なのですか。

- 記名をしなくてもいいと思うのですが、これ、相談の方法がいろいろございまして、例えば携帯電話、あるいはパソコンからメールで相談するような受け付けもしておりまして、それからもちろん直接相談室に行くとか、幾つかの方法がありますので、現在は非常に軽い相談についてはメール等を頻繁に利用する学生が多いよう

でして、もちろんこれは匿名でできますので、相談箱もあるわけで、それがうまく活用できることにこしたことはないと思うのですけれども、全体的に見れば、そういうふうに匿名での相談もできますので、相談箱そのものにあまりこだわる必要はないという思いもしております。

- 規則等で名前を書きなさいというようなことになっていませんか。規程上は表示があっても勝手なことを書いていないか。個人的な使用として誹謗・中傷的なことはないか。例えば私たちの学部であったのですが、本当にできない子で、1つの科目を3年も4年も落としている子が、本当にできないのですよ、その担当の先生を恨んだ形で何か掲示板に載せたりしたのです。本人を呼んで、何でそうなのかということを引きつり丁寧に説明するとわかりましたけど、そんなことがあったら困るなと思います。
- 特に教職員を誹謗中傷するような内容のものを受けたということは聞いておりませんが、むしろ非常に命にかかわるようなせっぱ詰まったことをメールで送ってきたりしたことが過去にあったというようなことも、聞いております。
- この図書館の利用なのですけれども、やっぱりどこの、ここに、米子の図書館もそうなのでしょうけれど、本当に夏の時分に勉強する場所にしかなくて、もともとから本を読むという習慣がだんだんとなくなってきている部分があるので、本当に小学生、中学生に言うようなことになるのだらうと思うのですけれども、やはり利用するというか、とにかくせっかくある図書館をどのように活用させるかというのもある程度、強制的じゃないのですけれども、やはり高専でも読書の時間をつくるとか、小学生、中学生の世界になってしまうのでしょうか、やはりそういうようなところまで本当に今は持ってこない、あるだけということではなくて、子供たちがやはり本を読むことによってどれだけ力がついてくるのかということ、ある程度もっとよく実感をさせるような、そういう働きかけというか、仕組みはないものだろうかと思ったりするのですけれども。本当に小学校、中学校でもするのですけれども、なかなか読まないというところは、最近は多いのですが。
- 図書館の利用と関係あるかどうかわからないのですが、読書の啓蒙として読書感想文コンクールをやっております。
- 「としよぶらり」という図書館の本に読書感想文コンクールの結果が出ているのですけれども、そこに書いてある感想文、どういう本についてかという、かなり高度な、あるいは、こんな本があったのかというようなものを結構学生達を読んでおります。それは図書館でしか見つけられないようなもの、ですから私が読書感想文コンクールを見て、その文章が上手、下手というのはありますけれども、何を素材にしているのか、どう考えようとしたのか、そこは私、結構安心をいたしております。

また、図書館自体としても、購入する本について、その一部分を学生自身に選ばせる、学生にお金を与えて、学生たちがこれという本を買ってこさせる、こういうようなこともやっておりますので、私は昼休みなんかにたまに行くのですが、学生

たちもおりますし、多分借りて、特に寮生なんかは結構読んでいると、私はある程度楽観しておるのです。

○ うちの子の話になってしまって恐縮ですけど、結局うちにも帰って、いろいろ課題とかなんとか、要はインターネット経由で簡単にデータを出しては、それを打ち出して、それを持っていけばよいものは持っていき、それではなくて手で書かないといけないものは手で書いていくとかというところで、何かせつかくそれだけ良い蔵書その他があるのに、実際どう、現場ではどうなのかわからないんですけど、もっとそういうものも活用させるような工夫というか、勉強のさせ方というか、課題の出し方は、何かないものかなと思います。

● 昔はレポートを書いたりするためにも図書館を使っていました。ところが、米子高専では数年前コラボレーションゾーンを各所につくりましたので、専らそういうところを使って学生はレポートを書くようになり、図書館の利用度は下がってきたように思います。

それから次に、情報コンテンツの形態が、例えば今おっしゃったように、印刷物ではなくウェブからのデジタル・コンテンツに変わり、図書館より、むしろ情報センター、こちらの利用に移行してきていると思います。

ちょうどこの前、副校長を中心に、これはJ A B E Eの受審準備とも関係してきますが、米子高専でも大学と同じ大学単位、学修単位を取り入れましたので必ず自学自習させなければならず、授業に必要なアプリケーションは学生個人のパソコンには入っていませんので、そのための施設を工学系の場合は開放してやらなければならず、そういう準備などもしています。

3. 閉会挨拶

閉会に当たり校長から、次のとおり挨拶があった。

「指摘された事項がいろいろありましたが、図書館の利用といった細かい点や、あるいは教養教育の関係、創造性をはぐくむ教育の関係と、非常に大きな問題もあります。教養教育の関係などは、そもそも教育をどう考えていったらいいだろうかと、高専全体の問題とも絡むような問題もありますし、また一方、英語教育についての指摘があったのですけれども、私自身は他の高専で英語教育をどうやっているかを比べますと、やっぱり本校としては、まだ足りないなど、そういう、具体的にこれからやっていかなければならない問題もあります。いただきました御意見をもとに、本校として、よりよい学校とするために、今後とも検討を重ねてまいりたいと思っておりますので、今後ともよろしく指導お願いいたします。」